

# 学びのプラン (授業案)

## 授業構想時

### 高等部1年 「国語科」

#### 「クロスワードの世界へようこそ」 (全11時間)

授業者

場所

A~C の欄については、一般的な指導案の児童生徒観、教材観等、従来長い文章で表していたものを、簡潔に図式化したものと捉えていただけるとよいかと思います。

前期・後期シート

#### A 実態 (実態個票、日々の見取りから)

- 問題を作るのが好き。
- 好きなワードがある。
- スリーヒントクイズを既習。
- 文章は自分で書ける。

子どもの実態(生活経験、興味関心)が出発点です。「面白そう」「やってみたい」「できるかも」の思いは指導内容ありきでは生まれないと考えます。

#### C 同一のテーマや教材 = 前のめりになるネタ ≠ 「○○を比べよう」などの同一課題の一斉指導とは違います。

#### クロスワードの世界へようこそ

#### B 教科実態確認表から 扱う領域 = 習得させたいこと

- 書くこと
- 聞くこと・話すこと

具体的なデータで根拠を明確にしています。  
同時に教科の内容と系統性を意識します。

使える知識=概念化につなげます。

生活のどこにつながるか

- 物事を多角的に捉えて、相手に伝わるように詳しく説明する力がついてほしい。
- クロスワードの楽しさを余暇にもつなげたい。

#### D 単元計画

1~2教時	つかむ	3~9教時	広げる	10~11教時	深める・まとめる
・クロスワードのやり方を知り、自分で解く。	・個々で問題を作ってみる。 ・友達同士で出題し合う。 ・友達とペアになって問題を作る。	・身近な教師に出題し感想をもらう。 ・もらった感想をもとに自分たちの作った問題について自己評価し、発表する。			

#### E 子どもの特性と、単元で自らつかむ学習課題(問い合わせ・感情)

生徒A

- 思いついたことを自分の言葉で表現しようとする。
- 書きたいことを自分なりにまとめること。

生徒B

- 表したいことや伝えたいことを知っている表現を組み合わせて文に表す。
- 脱字が多いが、すらすらと思いついたことを書く。

#### E 子どもの特性と、単元で自らつかむ学習課題(問い合わせ・感情)

生徒C

- 自分の思いを言葉にしたり文に表したりする。
- 難しい言葉や漢字を使いたがり、自分なりに正しく表記しようとする。

生徒C

- 教師に相談しながら課題を進めようとする。
- 知らないことを聞いたり、辞書を使って調べたりする。

- よし！これでいこう。

あれ？伝わらないなあ。

- 漢字で書きたいから辞典で調べよう。

- アイディアが浮かばないな。先生に確認したいな。

- 問題文を作るヒントが欲しいな。辞典で調べてみよう。

子どもたち一人一人の授業に関わる実態を捉え、どのような課題をつかむかをあらかじめ予想し、個別の支援につなげます。

F

#### 〈はたらきかけの工夫〉

- 友達の得意な部分を認め合い、ペアで協力できるよう仲立ちをする。
- 問題文を作る過程を楽しめるよう、うまくできたことや工夫したことを称賛しながら進める。

#### 〈教材・教具の工夫〉

- 興味関心をもってクロスワード作りに取り組めるよう、正解が自分の好きな言葉(食べ物やキャラクターなど)になるようにする。
- 友達と協力することで完成できるように、2人で1つのクロスワードを作るようとする。
- 必要なとき言葉を調べられるように、実態に合った辞典(国語辞典、言葉辞典)を準備する。
- 良い問題文になっているかどうかをAI(Gemini)に出題して確かめるようにタブレット端末を用意する。
- 問題文作りに悩んだときは、修飾語(色、形、大きさなど)を加えて文が作れるようにスリーヒントメモを用意する。

#### 〈環境設定の工夫〉

- 友達同士で教え合ったり、協力し合ったりできるよう、2人組のグルーピングにし、席を隣り合わせにする。
- お助けグッズ(辞典、スリーヒントメモ)を使いたいときに使えるように、大テーブルに準備しておく。
- 問題文を作りながら出てきた工夫をメモに残し掲示しておく。

(別紙)  
本時の目標  
にリンク

E から予想される、個別の支援、環境設定の工夫等の部分です。一人一人の個別最適な学びの出発点となります。当然、授業が進むたびに支援も変わっていきます。

## G 単元目標

	知識及び技能	思考力・判断力・表現力等	学びに向かう力・人間性等
生徒A	・知っている言葉を説明する短い文を適切な表現で書く。	・集めた材料の中から、書くことを選んだり整理したりして、詳しく表現する。	・思いついたことや考えたことを文に書こうとする。
生徒B	・誤字脱字（濁点）に気を付けながら、知っている言葉を説明する文を書く。	・相手に伝わる文になっているかどうかを読み直して判断しながら、誤字脱字に気づく。	・書いた文を相手に伝わりやすい文になっているかどうか確認しようとする。
生徒C	・知っている言葉について相手がイメージできるような説明の文を書く。	・書いた文が相手に伝わるかどうかを友達に尋ねて判断し、表現を工夫する。	・読みやすく相手に伝わりやすい文を書こうとする。
生徒D	・知っている言葉を説明する短い文を適切な表現で書く。	・形や色、大きさなどの情報を加えながら、詳しく表現する。	・友達の考えを聞いたり、疑問に思ったことを質問したりしようとする。

H

G 一人一人の実態に合った目標が、同じ活動の中で設定されます。

これから社会は「きまりきった答え」を求められる社会ではありません。予測不能な社会を豊かにたくましく生きていくには「最適解」を追究することがメインとなります。「最適解」を追究するにあたり、人の自然な学び方が「協働的な学び」となります。ですので、目標は別々ですが「共に学ぶ」こととなります。



- ・国語辞典
- ・スリーヒントメモ

## 単元スタート

### J 児童生徒の姿（それぞれがつかんだ課題、会話、対話、考え方の交流など）

1～2教時 つかむ	3～9教時 広げる	10～11教時 深める・まとめる
生徒D：なぞなぞを解くみたいでおもしろい。 生徒B：分かると楽しい。 生徒A：むずかしい問題にチャレンジしたい。 生徒C：クロスワードを作ってみよう。	生徒B：「オレンジ色のフルーツ」だけだと答えがたくさん出てきてしまう。 生徒D：問題の文が分かりづらいと解けない。 生徒A：「スーパー戦隊」と「スーパー銭湯」が似ているから、詳しく説明する言葉を加えないと。 生徒C：作ったクロスワードをお互いに解いてみたい。	

教師の意図せぬところから、子どもたちは学びの起点をつくり、広げ深めること有多々あるかと思います。子どもたちとの「対話」を通して、時に予定していた内容を変更していくこともあります。教科の見方考え方を働きかせて、思考判断しながら学びを深めていくように、児童生徒の姿をその都度捉え、子どもに合わせて授業を進めるための欄となります。子どもの姿を読み取り、より充実した活動につなげたいと考えます。



### K 学習の成立、深まり、広がり

- ①コーディネーター、ファシリテーターとしての「教師」の手立て・支援
  - ②「個別最適な学び」の手立て
    - I 指導の個別化 II 学習の個性化
- ※Iについては本図Fに具体的に記載。  
 ※②IIに関しては I の結果、情報の収集、整理・分析、まとめ・表現を行う等の具体的な場面が出てくると考えられる。

参考資料:『「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を目指して』奈須正裕 伏木久始 編著 北大路書房 2024

「子供が学びを深める授業」新潟大学教育学部付属特別支援学校特別支援教育研究会 編著 ジアース教育新社 2018

令和7年度 山形県立鶴岡養護学校 公開授業研究会における東北文教大学 人間科学部 子ども教育学科 特任講師 大谷敦司氏の助言より